

“キャラ”の有無およびその受け止め方と大学生の自己 —自尊感情, アイデンティティ, 自己愛に着目して—

島 義 弘*

(2018年10月23日 受理)

Existence/absence and acceptance of “Kyara” affect self in Japanese university students:
Self esteem, identity, and narcissism

SHIMA Yoshihiro

要約

本研究では、キャラの有無、およびキャラがある場合にはそれをどのように受け止めているかが、大学生の自己に関する諸変数（自尊感情、アイデンティティ、自己愛）とどのように関連するかを検討した。大学生 214 名を対象に質問紙調査を行ったところ、キャラ有群はキャラ無群よりも自尊感情と心理社会的同一性の得点が高かった。また、キャラの受け止め方を 4 クラスター（拒否群、受容群、無関心群、積極群）に分類し、キャラ無群も含めた 5 群間で比較したところ、自尊感情と、対自的同一性を除くアイデンティティの感覚の多くは積極群、受容群の得点が拒否群、キャラ無群よりも高く、自己愛にはその逆の傾向が認められた。以上のことから、大学生にとって、キャラがあること、特にそのキャラを消極的にでも受容していることが心理社会的適応に資することが示された。今後は、本研究では扱えなかったキャラの数や種類等も含めて、より実態に即したキャラについての検討が必要である。

キーワード: キャラ, 自尊感情, アイデンティティ, 自己愛

問題と目的

“キャラ”という語は 2000 年ごろから使われるようになってきた若者言葉であり、集団の中での個人の立ち位置を表す言葉として定着している。キャラはキャラクター (character) を略した語ではあるが、単なる省略形としてではない、特別な意味を付されている。伊藤 (2005) によると、『キャラ』とは『キャラクター』から区別するために用いられる名称で、一般名詞として『人格』や『性格』、あるいは小説や劇、映画の『登場人物』、そして『文字』『記号』

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

という意味を持つ“character”から区別をして、“Kyara”という」のであって、「多くの場合、比較的簡単な線画を基本とした図像で描かれ、固有名で名指しされることによって（あるいは、それを期待させることによって『人格・のようなもの』としての存在感を感じさせるもの』であると説明している。伊藤（2005）の説明は、基本的にはミッキーマウスやハローキティのような、商業的に創造されたキャラクターがそれを愛玩する使用者によって「人格・のようなもの」を付与されてキャラ化する現象に対してなされたものである。しかし、同様のことは現代の単純化された（余分な側面・情報を削ぎ落とした）対人関係にも通底するものがある。例えば、インターネット上では氏名や年齢、性別を明かさずに（時にはそれらを偽って）、単一の目的に沿って人が集い、関係が形成される。また、学校や職場などの対人場面でも、自他を「〇〇キャラ」というプロトタイプに当てはめ、自身はそれに沿った言動を取り、他者に対してはキャラに沿った言動を取るよう期待している。これらは、「比較的簡単な線画」で個人を表現し、実際とは必ずしも整合しない「人格・のようなもの」をまとい、まとわせ、「そのような人物」として振る舞うことによって人がキャラ化するという点で、伊藤（2005）の指摘と一致する。

現代青年の友人関係の特徴として、相手も自分も傷つかないように、内面的な深いかかわりを避けて表面的で楽しい関係を築こうとする傾向があることが指摘されている（岡田，1999，2011）。このような、対立の回避を最優先にする「優しい関係」（土井，2008）の構築を図る青年にとって、キャラは自他ともに「本当の自分」をさらけ出すことなく、表面的な関わりを可能にする便利な「ツール」である。同時に、与えられた、あるいは獲得したキャラに沿った言動を取る「キャラを介したコミュニケーション」によって、集団からの受容や他者理解が容易になるなど、キャラは対人関係を単純化し、その構築、維持に資する機能も持つ（土井，2009）。また、友人からキャラを付与されることに安心感や満足感、被受容感を抱くこと、逆に「キャラがない」ことは不安を掻き立てるものであることも報告されている（瀬沼，2007）。つまり、キャラは本人の意思やキャラクター（心理学ではパーソナリティ）とはある程度独立に、他者から与えられることによって集団に受容され、「居場所」を得ることにつながっていると考えられる。現代青年にとってキャラは対人関係のインターフェイスとして重要な意味を持つものなのである（斎藤，2011）。

以上、簡潔に述べたものの他にもキャラについては様々な論考があるが、これらは主として社会学の観点からの分析、考察である。これに対して千島・村上（2015，2016）はキャラを「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ」と定義し、友人関係におけるその適応的な意味について心理学的な研究を行っている。それによると、大学生はキャラがあることで分かりやすく楽しい友人関係が築けるというメリットがある一方で、言動が制限されたりキャラにとらわれてしまったりするといったデメリットも認知されていること（千島・村上，2015）、キャラがある人はない人よりも友人関係満足度や自己有用感が高く（千島・村上，2015，2016）、キャラがある人の中ではそのキャラを消極的にでも受け入れているこ

とが高い居場所感（自己有用感と本来感）につながることを示された（千島・村上，2016）。

千島・村上（2015，2016）の研究は、キャラにはネガティブな側面もあるものの、キャラを持つこと、あるいはそれを受け入れてキャラを演じることが友人関係に対してポジティブな影響を与えることを示したものと考えられる。同様に、岡田（2011）は傷つけること／傷つけられることを回避することによって友人からの拒絶感を低減し、被受容感を高め、結果として自尊感情が高まることを報告している。このように、キャラを介したコミュニケーションによる表面的で傷つけあうことを避ける友人関係が心理・社会的適応に結び付くことが、現代青年の特徴として報告されている。一方で、従来、共感や自己開示等を通じた深い関係が青年の人格の成長を促すということが主張されてきた（西平，1973）。表面的な友人関係（岡田，2011）およびキャラを積極的に受容していること（千島・村上，2016）が高い自尊感情をもたらすことは示されているが、他の視点からはキャラと自己の関連については検討されていない。そこで、本研究では自己に焦点を当て、キャラがあること、およびそのキャラの受け止め方が大学生の自己の在り方とどのように関連するのかを検討することを目的とする。その際、自己に関する変数として、先行研究（千島・村上，2016；岡田，2011）で取り上げられている自尊感情に加えて、アイデンティティ（自我同一性）と自己愛を取り上げる。

自尊感情は自己についての評価的感情であり、適応の指標として多くの研究で取り上げられている。千島・村上（2016）ではキャラの有無と自尊感情の間に有意な関連は見出されなかったが、これまでの論考から（土井，2008；瀬沼，2007），キャラを持ち、キャラに応じた言動をとることで円滑な友人関係が可能になるのであれば、キャラがある人はない人よりも高い自尊感情を有しているものと考えられる。

次に、アイデンティティ（Erikson, 1963 仁科訳 1977, 1980）は青年期の重要な発達課題であり、「自分は何者か」「自分の存在意義は何か」など、自己を社会の中に位置づける問いに対して肯定的かつ確信的に回答することのできる状態を指す。青年期はアイデンティティを確立するために自己探求が行われる時期であり、その際、一時的に自我が揺らぐ（アイデンティティ拡散）。ところで、従来の知見では、他者から支えられて、あるいは自身の姿を他者に投影することを通して自己理解を図り、この揺らぎからの脱却が試みられるとされてきたが（西平，1973），キャラを介した表面的なコミュニケーションを取る青年にとって、キャラがあること、あるいはそれを受け入れることがアイデンティティという発達課題に対してどのような影響を与えるのかは明らかではない。キャラを介したコミュニケーションを取る青年は友人に対して様々なキャラを付与している一方で自分自身のキャラは「分からない」とするものが多く（瀬沼，2007），ここにも不明確な自我を抱える青年の姿が示されている。谷（2001）によると、アイデンティティには自分が自分であるという一貫性や時間的連続性についての感覚である「自己斉一性・連続性」、自分の目標や望んでいるものが明確に意識されている感覚である「対自的同一性」、他者からみられているであろう自分が本来の自分と一致しているという感覚である「対他的同一性」、自分自身と社会との適応的な結びつきの感覚である「心理社会的同一性」の

4 側面がある。キャラを「集団の中で個人に割り振られた役割」であると考えれば、キャラは集団に個人を位置づける機能を担っていると考えられるため、キャラがあり、それを受け入れているということはポジティブなアイデンティティの感覚（特に対他的同一性と心理社会的同一性）を有していることと関連するのではないかと考えられる。

また、青年期は自己愛傾向が高まる時期であることが知られているが（Foster, Campbell, & Twenge, 2003; 中山・中谷, 2006; 相良, 2006）、これは心理社会的な自立に向けて親子関係や友人関係が変化する中で生じる自我の揺らぎやそれに伴う自尊感情の低下を防ぐ、ある種の防衛的な役割を担っているものと考えられる（Stolorow, 1975）。自己愛には他者の評価への敏感さや内気さ、対人恐怖的心性を特徴とする「過敏型」の自己愛と、誇大性や攻撃性、他者の反応への無関心さを特徴とする「誇大型」の自己愛の2側面がある（Gabbard, 1989; 中山・中谷, 2006）。誇大な自己愛は攻撃的、搾取的な対人関係を形成しやすく、過敏な自己愛は対人関係からの撤退につながりやすいなど（相澤, 2002; 清水・海塚, 2002）、自己愛傾向の高い人は対人関係に困難を生じさせやすいことが指摘されている（小塩, 1998）。その一方で、自己愛自体は個人の適応状態を維持するために高まると考えられているため（Stolorow, 1975）、高い自己愛を示すことそれ自体が不適応であるとは言い難いのもまた事実である。そのため、キャラと自己愛の関連について明確な予測をするのは困難であるが、青年期の一時点の研究では自己愛傾向の高さと対人関係上の困難さの間に関連が認められているため（相澤, 2002; 小塩, 1998; 清水・海塚, 2002）、キャラが対人関係上の適応と結びつくのであれば、キャラがある人はない人よりも自己愛傾向は低いと予測される。ただし、キャラが他者から与えられるものであるとすると、対人的な感受性の高さを表す過敏性は、キャラがある人の方が高い可能性も考えられる。

以上のことから、本研究では適応の指標として用いられる自尊感情、青年期の発達課題であるアイデンティティ、揺らぐ自我を支えるための防衛的機能を持つ自己愛の3つを自己に関する変数として取り上げ、キャラの有無、あるいはキャラの受け止め方とこれらの変数の関連について検討することで、キャラが大学生の自己の発達や心理社会的適応に与える影響を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

大学生 214 名（男性 73 名、女性 140 名；*mean age* = 20.22, *SD* = 1.02）を対象として質問紙調査を実施した。このうち、日本語母語話者ではない留学生 1 名（女性）を除いた 213 名を分析の対象とした。

調査内容

自尊感情 Rosenberg (1965) が作成し、山本・松井・山成 (1982) が邦訳した自尊感情尺

度を使用した。この尺度は1因子10項目で構成されている。「あてはまらない=1」から「あてはまる=5」までの5件法で回答を求めた。

アイデンティティ 谷(2001)の多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; MEIS)を用いた。この尺度は自己斉一性・連続性, 対自的同一性, 対他的同一性, 心理社会的同一性の4因子で構成されている。「全くあてはまらない=1」から「非常にあてはまる=7」までの7件法で回答を求めた。

自己愛 中山・中谷(2006)の評価過敏性-誇大性自己愛尺度を使用した。この尺度は評価過敏性と誇大性の2因子で構成されている。「全くあてはまらない=1」から「とてもあてはまる=5」までの5件法で回答を求めた。

キャラ (1) 大学内で所属するフォーマルグループ(学科, 専修, コースなど)から1つの集団を思い浮かべ, その集団の記入を求めた。(2) 次に, キャラの有無について尋ねた。「自分にはキャラがある」「全く思いあたらない」の2項目から, 当てはまる方にチェックを求めた。(3) 「自分にはキャラがある」にチェックを入れた調査対象者には, キャラの受け止め方尺度(千島・村上, 2016)への回答を求めた。この尺度はキャラの積極的受容(以下, 積極的受容), キャラの拒否(以下, 拒否), キャラへの無関心(以下, 無関心), キャラの消極的受容(以下, 消極的受容)の4因子で構成されている。「まったくあてはまらない=1」から「とてもよくあてはまる=5」の5件法で回答を求めた。なお, 本研究では調査対象者が思い浮かべた集団について質問するため, キャラの消極的受容の2項目については「友だち」「周り」を「集団内」に置き換えた。

結果

尺度構成

キャラの受け止め方尺度は原尺度から項目の表現を変更したため, 因子分析(最小二乗法, プロマックス回転)によって因子構造を確認したところ, 原尺度と同様の4因子が抽出され, 信頼性係数も十分な値を示した($\alpha = .77-.84$)。残りのすべての尺度は原版と同様の因子構造を仮定して尺度を構成し, 信頼性係数を求めた。その結果, すべての因子について満足のいく値が得られたため($\alpha = .81-.88$), 本研究では原版の尺度構成に従うことにした。各変数の加算平均(M), 標準偏差(SD)と合わせてTable 1に示した。

キャラの有無と各変数の関連

「自分にはキャラがある」と回答したのは135名(63.7%)であった。キャラの有無別の相関係数をTable 2に, キャラの有無別の平均値とその差の検定結果をTable 3に示した。

Table 2より, キャラ有群とキャラ無群では, 自己に関する諸変数(自尊感情, アイデンティティ, 自己愛)の相関関係に大きな差異は認められなかった。キャラ有群におけるキャラの受け止め方と自己に関する諸変数の相関関係を検討したところ, 積極的受容は自尊感情と

Table 1. 各変数の記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
自尊感情	3.04	0.69	.86
アイデンティティ			
自己斉一性・連続性	4.55	1.37	.88
対自的同一性	4.06	1.24	.86
対他的同一性	3.93	1.07	.83
心理社会的同一性	4.20	1.04	.81
自己愛			
評価過敏性	2.95	0.87	.87
誇大性	2.58	0.66	.84
キャラの受け止め方			
積極的受容	3.22	0.69	.84
拒否	2.33	0.75	.77
無関心	3.48	0.95	.79
消極的受容	3.64	0.86	.77

注. キャラの受け止め方はキャラ有群のみ

正の相関 ($r = .33, p < .001$), アイデンティティの各下位尺度と正の相関 ($r = .27-.39, ps < .01$), 評価過敏性とは負の相関 ($r = -.17, p < .05$) を示した。一方, 拒否は心理社会的同一性を除くアイデンティティの各下位尺度と負の相関 ($r = -.19-.35, ps < .05$), 評価過敏性とは正の相関 ($r = .37, p < .001$) を示した。また, 無関心は自己斉一性・連続性と正の相関 ($r = .21, p < .05$), 評価過敏性とは負の相関 ($r = -.17, p < .05$) を示し, 消極的受容は自己斉一性・連続性と負の相関 ($r = -.20, p < .05$), 評価過敏性と正の相関 ($r = .32, p < .001$) を示した。

キャラの有無別の平均値差の検定では, キャラ有群はキャラ無群よりも自尊感情 ($t(210) = 2.82, p = .005, d = 0.40$) と心理社会的同一性 ($t(200) = 4.31, p < .001, d = 0.63$), 誇大性 ($t(209) = 4.13, p < .001, d = 0.59$) の得点が有意に高く, 対他的同一性 ($t(201) = 1.74, p = .08, d = 0.25$) と評価過敏性 ($t(209) = 1.70, p = .09, d = 0.24$) の得点差は有意傾向であった。

キャラの受け止め方と自己の関連

キャラの受け止め方の特徴を把握するために, キャラの受け止め方の4下位尺度を標準化した上でクラスター分析(Ward法, ユークリッド平方距離)を行った。その結果, 4つのクラスターが抽出された(Figure 1)。クラスター1は拒否のみが高いため, 拒否群($N = 34$)とした。クラスター2は全体的に値が低く, 積極的受容と消極的受容が正の値を示したため, 受容群($N = 43$)とした。クラスター3は無関心と消極的受容が高かったため, 無関心群($N = 44$)とした。クラスター4は積極的受容が高く, 拒否と消極的受容が低いため, 積極群($N = 13$)とした。

Table 2. 各変数の相関係数(キャラの有無別)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 自尊心	—	.47***	.48***	.43***	.62***	-.45***	.54***	.33***	-.16†	.06	-.09
アイデンティティ											
2 自己者一性・連続性	.43***	—	.54***	.65***	.54***	-.47***	.06	.39***	-.35***	.21*	-.20*
3 対自的同一性	.38***	.64***	—	.40***	.56***	-.26**	.25**	.28**	-.19*	.16†	-.16†
4 対他的同一性	.28*	.55***	.32**	—	.60***	-.33***	.11	.38***	-.26**	.14	-.12
5 心理社会的同一性	.66***	.49***	.46***	.50***	—	-.36***	.39***	.27**	-.16†	.17†	-.13
自己愛											
6 評価過敏性	-.43***	-.47***	-.35**	-.40***	-.41***	—	-.02	-.17*	.37***	-.17*	.32***
7 誇大性	.51***	.07	.22†	.03	.39***	.19†	—	.14†	.04	-.13	-.01
キャラの受け止め方											
8 積極的受容	—	—	—	—	—	—	—	—	-.43***	.01	-.09
9 拒否	—	—	—	—	—	—	—	—	—	-.28**	.11
10 無関心	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	.10
11 消極的受容	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注. 右上半分はキャラ有群 (N = 125-135), 左下半分はキャラ無群 (N = 76-77)

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 3. キャラの有無別の平均値(M)と標準偏差(SD)および平均値差の検定の結果

	有			無			t	df	p	d	95% CI
	N	M	SD	N	M	SD					
自尊感情	135	3.14	0.69	77	2.86	0.66	2.82	210	.005	0.40	0.08 - 0.47
アイデンティティ											
自己斉一性・連続性	127	4.57	1.34	76	4.54	1.42	0.12	201	.90	0.02	-0.37 - 0.41
対自的同一性	127	4.17	1.18	76	3.90	1.31	1.52	201	.13	0.22	-0.08 - 0.62
対他的同一性	127	4.03	1.09	76	3.76	1.01	1.74	201	.08	0.25	-0.04 - 0.57
心理社会的同一性	126	4.44	0.98	76	3.81	1.02	4.31	200	<.001	0.63	0.34 - 0.91
自己愛											
評価過敏性	134	3.02	0.91	77	2.81	0.78	1.70	209	.09	0.24	-0.03 - 0.46
誇大性	134	2.70	0.65	77	2.33	0.60	4.13	209	<.001	0.59	0.19 - 0.55

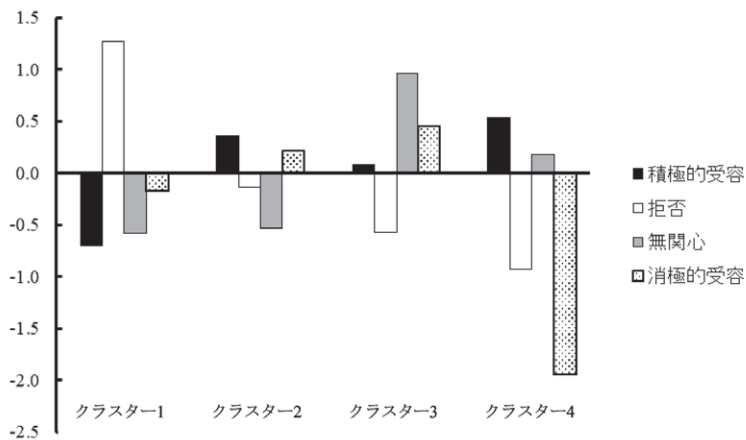


Figure 1. クラスタ分析の結果

キャラの受け止め方4群の自己に関する諸変数の平均値を、キャラ無群と合わせて Table 4 に示した。自己に関する諸変数について、キャラ無群も含めた5群間の平均値差について分散分析を行ったところ、対自的同一性を除く6変数の平均値差が有意であった。平均値差が有意であったものについては Bonferroni 法による多重比較を行った。

自尊感情 ($F(4, 206) = 3.39, p = .01, \eta^2 = 0.06$) は受容群の得点がキャラ無群よりも高く、自己斉一性・連続性 ($F(4, 197) = 6.28, p < .001, \eta^2 = 0.11$) は積極群の得点が高い群よりも高く、拒否群の得点は受容群よりも低かった。対他的同一性 ($F(4, 197) = 3.86, p = .005, \eta^2 = 0.07$) は積極群の得点が拒否群よりも高く、心理社会的同一性 ($F(4, 196) = 5.63, p < .001, \eta^2 = 0.10$) はキャラ無群の得点が拒否群以外の3群よりも低かった。評価過敏性 ($F(4, 205) = 7.16, p < .001, \eta^2 = 0.12$) は拒否群の得点が受容群を除く3群よりも高く、積極群の得点は受容群よりも低かった。誇大性 ($F(4, 205) = 4.56, p = .002, \eta^2 = 0.08$) は受容群の得点がキャラ無群よりも高かった。

考察

まず初めに、本研究では「キャラがある」と回答したものが63.7%と、先行研究(千島・村

Table 4. キャラの受け止め方(4クラスター)とキャラ無群の平均値(括弧内は標準偏差)と平均値差の検定結果

	1	2	3	4	5	F	df	p	η^2
自尊感情	2.90 ^{a,b} (0.63)	3.24 ^a (0.64)	3.17 ^{a,b} (0.77)	3.28 ^{a,b} (0.65)	2.86 ^b (0.66)	3.39	4, 206	.01	0.06
アイデンティティ									
自己斉一性・連続性	3.85 ^a (1.02)	4.74 ^b (1.14)	4.63 ^{a,b} (1.42)	5.97 ^c (0.89)	4.54 ^{a,b} (1.42)	6.28	4, 197	<.001	0.11
対自的同一性	3.81 (0.89)	4.40 (1.09)	4.16 (1.40)	4.57 (0.99)	3.90 (1.31)	2.09	4, 197	.08	0.04
対他的同一性	3.54 ^a (0.91)	4.17 ^{a,b} (1.00)	4.06 ^{a,b} (1.24)	4.67 ^b (0.90)	3.76 ^{a,b} (1.01)	3.86	4, 197	.005	0.07
心理社会的同一性	4.14 ^{a,b} (0.84)	4.48 ^a (0.90)	4.46 ^a (1.06)	4.80 ^a (1.10)	3.81 ^b (1.02)	5.63	4, 196	<.001	0.10
自己愛									
評価過敏性	3.51 ^a (0.74)	2.99 ^{a,b} (0.89)	2.92 ^{b,c} (0.84)	2.20 ^c (1.01)	2.81 ^{b,c} (0.78)	7.16	4, 205	<.001	0.12
誇大性	2.67 ^{a,b} (0.61)	2.80 ^a (0.57)	2.62 ^{a,b} (0.73)	2.66 ^{a,b} (0.61)	2.33 ^b (0.60)	4.56	4, 205	.002	0.08

1：拒否群，2：受容群，3：無関心群，4：積極群，5：キャラ無群
異なるアルファベット間で有意差あり（Bonferroni法による比較，5%水準）

上，2015，2016；瀬沼，2007）よりも若干高い値であった。これは，本研究が漠然と「集団の中でのキャラ」を問うのではなく，具体的な集団を想定させたうえで，その中でのキャラを問うたことに起因するものと考えられる。現代青年にとって，ある程度固定された集団の中で過ごすにあたって，キャラを有するということが当たり前になりつつある現状がうかがえる。

キャラの有無と自己

それでは，キャラがあるということは，当該青年の自己のあり方とどのように関連するのだろうか。キャラ有群とキャラ無群を比較したところ（Table 3），自尊感情と心理社会的同一性，誇大性はキャラ有群のほうが有意に高く，対他的同一性と評価過敏性は傾向レベルでキャラ有群のほうが高かった。これらのことから，キャラがある人はキャラがない人よりも自尊感情が高く，ポジティブなアイデンティティの感覚（特に対他的同一性と心理社会的同一性）を有するとした仮説は支持された。現代青年にとって，「キャラがある」ということは安心感や被受容感の源であり，集団内に「居場所」があることを意味している（千島・村上，2016；瀬沼，2007）。そのため，キャラがあると認知している人は，個人の社会的適応の指標であるソシオメーター（Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995）としての自尊感情が高くなったものと考えられる。また，キャラ自体は他者から与えられたもの，あるいは他者からの承認が得られたものであることから，キャラの有無は他者の視線や自身と社会との結びつきがより強く反映された対他的同一性，心理社会的同一性との結びつきが現れたのだろう。アイデンティティの感覚について，谷（2008）は谷（2001）の4側面をより上位の2側面，すなわち対自的で主観的なアイデンティティの感覚である自己斉一性・連続性，対自的同一性と，対他的で社会的なアイデ

ンティティの感覚である対他的同一性、心理社会的同一性に分けて考えることができるとしているが、本研究ではキャラの有無はアイデンティティの社会的側面と関連を示したことになる。集団の中でキャラをもって生活するということは、内面的、主観的というよりもむしろ社会との関係の形成・維持という部分でアイデンティティの感覚を強めていることが示された。

一方、自己愛については明確な予測は立てられなかったが、キャラがある人のほうが評価過敏性、誇大性ともに高いということは、キャラを有することによって、与えられた（あるいは獲得した）キャラを演じることができているかをモニターする必要性が生じていること、「キャラ的」であるために誇張した表現の要請に応えようとしていることの表れであると考えられる。自己愛が高いこと自体の是非は不明であるが、自尊感情、アイデンティティの感覚がともに高いことと合わせて鑑みると、本研究からはキャラを引き受けることによって高まった自己愛が心理社会的適応を保障するような、防衛的な働きをしている可能性が推察される。

キャラの受け止め方と自己

クラスター分析の結果、キャラの受け止め方には積極的に受容する群（積極群）、関心はあり、拒否はしないがその態度は積極的とも消極的ともいえない群（受容群）、キャラに対して無関心だが消極的には受容する群（無関心群）、キャラを拒否する群（拒否群）の4クラスターが抽出された。キャラに対する積極性には濃淡があるが、全体的にはキャラを受容している人が多く（キャラがあると回答した人の74.6%）、これがキャラ有群の自己に関する諸変数の結果がキャラ無群よりもポジティブであったことの背景にあると考えられる。

しかしながら、キャラがあるということそれ自体が自己に対してポジティブな帰結をもたらすものであるとは考えられない。そこで、キャラ無群も含めて、キャラの受け止め方と自己に関する諸変数の関連を検討した（Table 4）。その結果、自尊感情とアイデンティティの感覚、誇大性は受容群と積極群の得点が拒否群、キャラ無群よりも高いものが多く、無関心群はその中間であった。ここで注目すべきは、たとえキャラがあってもそれを拒否している人たちは自尊感情、アイデンティティの感覚ともにキャラがない人たちと同程度であるということである。ただ単にキャラがあるというだけではなく、消極的にでもそれを受け入れていることが心理社会的適応をもたらすことが示唆された。また、評価過敏性は拒否群が最も高く、積極群が最も低いという結果となった。自身のキャラを積極的に受け入れてしまった人にとっては他者からの評価はもはや顧慮するに値せず、キャラを拒否している人が他者の視線をより強く感じ取ってしまうという本研究の結果は、個人の心理社会的適応を考える上で示唆的である。

今後の課題と展望

本研究では、キャラがあること、特にそのキャラを積極的に受け入れていることが大学生の心理社会的適応に資することを示した。先に述べたとおり、キャラについては社会学的な論考が先行しており、心理学的な研究は緒に就いたばかりである。現代の青年（あるいは成人も）の、

お互いが内面に踏み込まないことによって築かれる明るく快活な対人関係の基礎に、「本当の自分」とは切り離して演じられるキャラの存在が指摘されてきたが（土井，2009；斎藤，2011；瀬沼，2007），実のところ，キャラは対人関係のみならず，ポジティブな社会的関係の帰結としての自尊感情や社会の中での自己のあり方についての確信としてのアイデンティティの感覚，さらに自己についての肯定的な評価としての自己愛など，自己のあり方そのものにも強く影響を与えるものであることが示された。インターネット等の普及によって非対面的な対人関係が可能になったことと同期して「キャラを介したコミュニケーション」が広まってきたことを鑑みると，今後ますます，このような対人関係がありふれたものになっていくものと考えられる。その中で，キャラの持つ心理学的な意味を問うことは，現代を生きる人々の幸福や健康を考え，ひいては社会の側に問題を再提起することにつながるものである。

本研究はキャラについての心理学的研究の嚆矢の1つであるが，それゆえに課題も多く残されている。中でも，本研究ではキャラの有無とその受け止め方を問題としており，キャラの数や種類については扱っていない。キャラの種類については，青年の仲間関係の中では60種類近くのキャラがあることが報告されており（瀬沼，2007），その中には必ずしもポジティブとは言えないもの（例えばバカキャラ，キモキャラ等）も含まれている。学級で多くの時間を過ごす児童・生徒にとって，キャラはそれ自体が集団内での地位（スクールカースト：森口，2007）を表すものとなり，いじめ／いじめられ関係の背景に個人が与えられた，あるいは獲得したキャラとそれを反映したキャラ行動の存在が指摘されている（土井，2009；本間，2009）。そのため，どのようなキャラが付与（あるいは獲得）されているのかについても検討していく必要がある。また，同一個人でも異なる集団では異なるキャラを演じている可能性が高いが，本研究では単一のキャラしか扱っていない。社会心理学では複数の社会的関係の中で異なる自己を持ち，それらを統合することができないとアイデンティティが混乱するとされてきたが（Block，1961），キャラは関係ごとに異なることが前提としてある。多面的自己（多元的自我）とアイデンティティの関連についての研究も進められているが（木谷・岡本，2018），同一個人内に複数のキャラがあること，あるいはそのキャラ同士の関連性の程度と心理社会的適応の関連についても検討が必要だろう。

引用文献

- 相澤 直樹 (2002) . 自己愛の人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.
- Block, J. (1961) . Ego identity, role variability, and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 392-397.
- 千島 雄太・村上 達也 (2015) . 現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連—“キャラ”に対する考え方を中心に— 青年心理学研究, 26, 129-146.
- 千島 雄太・村上 達也 (2016) . 友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応—中学生と大学生の比較— 教育心理学研究, 64, 1-12.
- 土井 隆義 (2008) . 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル— 筑摩書房
- 土井 隆義 (2009) . キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像— 岩波書店
- Erikson, E. H. (1963) . *Childhood and society*. 2nd ed. New York, NY: W. W. Norton & Company. (仁科 弥生 (訳) (1977, 1980) . 幼児期と社会 1・2 みすず書房)
- Foster, J. D., Campbell, W. K., & Twenge, J. M. (2003) . Individual differences in narcissism: Inflated self-views across the lifespan and

- around the world. *Journal of Research in Personality*, 37, 469-486.
- Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- 本間 友巳 (2009)。「いじられキャラ」となっている子をどう考え、どう支援するか 児童心理, 63, 530-534.
- 伊藤 剛 (2005)。「テヅカ・イズ・デッド—ひらかれたマンガ表現論へ—」 NTT 出版
- 木谷 智子・岡本 祐子 (2018)。「自己の多面性とアイデンティティの関連—多元的アイデンティティに注目して—」 青年心理学研究, 29, 91-105.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- 森口 朗 (2007)。「いじめの構造」 新潮新書
- 中山 留美子・中谷 素之 (2006)。「青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討」 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 西平 直喜 (1973)。「青年心理学」 塚田 毅 (シリーズ編) 現代心理学叢書7 共立出版
- 岡田 努 (1999)。「現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について」 立教大学教職研究, 9, 29-39.
- 岡田 努 (2011)。「現代青年の友人関係と自尊感情の関連について」 パーソナリティ研究, 20, 11-20.
- 小塩 真司 (1998)。「青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連」 教育心理学研究, 46, 280-290.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 斎藤 環 (2011)。「キャラクター精神分析—マンガ・文学・日本人—」 筑摩書房
- 相良 麻里 (2006)。「青年期における自己愛傾向の年齢差」 パーソナリティ研究, 15, 61-63.
- 清水 健司・海塚 敏郎 (2002)。「青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連」 教育心理学研究, 50, 54-64.
- Stolorow, R. D. (1975). The narcissistic function of masochism (and sadism). *The International Journal of Psycho-Analysis*, 56, 441-448.
- 瀬沼 文彰 (2007)。「キャラ論」 STUDIO CELLO
- 谷 冬彦 (2001)。「青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—」 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 谷 冬彦 (2008)。「アイデンティティのとらえ方」 岡田 努・榎本 博明 (編) 自己心理学5 パーソナリティ心理学へのアプローチ (pp. 6-21) 金子書房
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982)。「認知された自己の諸側面の構造」 教育心理学研究, 30, 64-68.

付記

本論文は、鹿児島大学教育学部の授業の一環として梶原 日菜・川畑 優美・工藤 遥・霜重 美貴・田淵 千尋の5名が実施した研究を基に、著者が再分析、再構成したものである。研究に参加して下さった皆様と調査実施にご協力いただいた先生方に感謝いたします。